

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

西風と星のおとぎ話

【作者名】

旅人H

【あらすじ】

後に【西風】と呼ばれることになる少年と幼馴染の物語である。

始まり

彼と初めて会ったのは、お父さんが大怪我をして入院し、家族みんなが大変で、一人寂しい思いをしていた時だった。

思えばどうして仲良くなったか解らない出会い方で、子供とはいえ酷い、いや最低な行動だろう。何故なら、泣いている私に枕を投げつけ

『うっさい、夢の邪魔だから泣くならよそで泣けー！』
と、言ってきたのだから。

夢を見ている。

いつから見ているかは思い出せないけれど、胸がきつく締め付けられるように痛む夢。

誰かのお墓の前で3人の人たちが話し合っている。話が終わったのか一番年上だと思う男の人がどこかへ歩いていく。

残された黒い髪を肩位まで伸ばし、白い髪紐で一つまとめにしている男の人が墓に向かって言う。いつもの夢だと聞こえない声が今日は聞こえてくる。

「ほんとに望んじゃいけない事だと思う。でも姉さんが、『...』が生きていられる可能性が在ってもいいと思うんだ」

そう言っとうなだれる彼に向かって、栗色の髪をサイドテールにした女の人

「大丈夫だよ、・・・くん。きつと向ここの私達なら乗り越えてくれるよ」

うなだれていた顔を上げ男の人が

「ありがとう、」な・・・」

もう少して名前が聞こえる、そんな時に限り夢からさめようとする。もう少し、あと少しだけ時間が欲しい。

知りたいんだあの人の事を、あの女の人の事を。だってあの墓に刻まれた名前は・・・

『冬馬 由華』

俺の姉さんの名前で、墓に向かって姉さんと呼ぶあの男の人は俺のはずなんだから・・・

けど、現実には残酷に目を覚ましてしまう。

そして、目の前に携帯電話が浮かんでいた。

なんで、携帯が浮かんでるんだと考えるも理解が出来ない。しかも勝手にしゃべる。また姉さん関係の誰かがいたすらでも仕掛けたのだろうか、そんなことを考えていたら

『マスター？さっきから何やってんですか？』

冬馬ケ家訓【自分を弱くする常識は、踏み潰して突き進む】に乗っ

取り携帯の存在を無視しよう。

『いや、無視しないでくださいよ』

必死に自分の液晶やライトを光らせアピールする携帯。少しうっとおしく感じながら仕方がないので対応することにした。

携帯改めピースキーパー【ピース】から聞いた内容は次の通り。

一つ目、ピースはデバイスと言われる魔法使いの杖みたいなもの。

デバイスが携帯なのは、ある人物（製作者）の気に入った着うたが入っているから。

二つ目、【レアスキル】と呼ばれる力を持っている。

三つ目、そう遠くない未来俺は、自分の運命に出会う。

「大まかにこんな所だな」

『はい。それと力の説明をしますか？』

「ああ、頼む。知らないと使えないし」

『マスターは二つの力を持っています。一つ目は、手のひらからお菓子「ちよっと待て」「はい？』

「お菓子って、なぜ！」

いきなり予想の斜め上に行く力に思わず突っ込みを入れた俺は悪くないはず

『和菓子、洋菓子、コラボ菓子もだせます』

「何でそんな力を？」

『笑顔の魔法だからです。』

「いや、お菓子＝笑顔の意味が解らん」

『お菓子食べたなら笑顔になれるとか、そんな理由じゃないですか？』

「使えないスキルだな」

この力いったい何の為だか考えると、激しく頭が痛む。

『二つ目は、【完全世界】です』

「完全世界？」

『完全世界は、人や一定空間の時間に干渉し、編集する力です』

「一つ目と違ってチート臭いな」

『もし、怪我や死んだとしても、その部分の時間を消す事でなかった事に出来ます。また、相手を殴った時間をリピートさせる事で一瞬にリピートさせた回数分殴った事に出来ます』

「本気でチートだな」

『ですが制限があります。笑顔の魔法は、魔力を消費します。完全世界は、発動させると徐々に存在が消えていきます。』

「消えるって、そんな力使えねえ」

『一度に大量の時間を編集したり、連続発動しなければ大丈夫です。消えかけた存在分は時間がたてば補充されますから』

「それでも怖くて使えないっの」

とりあえず説明されたレアスキルとやらはいろんな意味で使えないと判断。

いろいろ説明されているものの、この世界には関わるともの凄く危険な人物がいるらしい。主に人生的に

「その、【ワールド・キーマン】ってなんだ？」

『ワールド・キーマンとは【アカシック・レコード】に記された大きな運命の中枢人物たちです』

運命の所でさっきのピースの説明に引っかかる事があったが

「関わる気ないな。だって、戦闘怖い。痛い嫌い、殴るの嫌い、怖いのムリ」

『はあ、そうですか』

なんか、携帯のくせに呆れてます、のリアクションむかつくな。

「まあ、魔法には興味あるから暇な時にでも教えてくれ」

『解りました〜』

ピースと話していたので、それなりに時間がたっていた。

「そろそろ出かけないと日課が出来ね〜」

『日課ですか?』

ピースと話をつつけながら出かける支度をする。

「うん、昼寝」

『何処で?』

「公園」

服装良し、ハンカチ・チリガミ良し、枕良し。

『枕持って?』

「うん!」

『変わってますね』

「子供だから問題無し。むしろ、微笑ましいんじゃない?」

『マスターがそれで良いなら何も言いません』

よし、お気に入りの抱き枕を……

「デバイスって収納スペースあるんだよな。ピースにも、収納スペースある?」

『はい、あります』

「じゃあ、枕入れて」

『かしこまりました』

ピースの画面が光ったと思ったら、枕が吸い込まれていった。便利な荷物持ちの誕生だ。

『何か酷い扱いを受けた気がします』

気のせい、気のせい。

「姉ちゃん、公園行ってくる」

「遅くならない様にね」

公園に着いたら、何時もの場所をゲット。風が穏やかで木陰が優しく光を遮って、最高の昼寝スポットなのだ！

「ピース、枕出して」

『周り人居ますよ？』

「手品って事に」

『認識障害の魔法を自動発動します』

「心配りができるな、コイツ。

「ありがとうそんで、おやすみ〜」

『おやすみなさいませ、マスター』

????
サイド

家に居てもする事がなく、寂しさに耐えられず、私は公園にやって来た。公園では仲良くボールを蹴りあっている男の子達。砂場で何か創っている子、集まって話している女の人達。私は、空いていたブランコに乗りその光景を眺めていた。

どれくらい時間がたったのか解らないけど、女の人に呼ばれ帰って行く子供達。公園に人が居なくなり、また寂しさが込み上げてきた。

「良い子でいなくちゃいけないもん。お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん。みんな頑張ってるから」

だから我慢する。わがまま言って困らせたくない。嫌われたくない。でも、涙が目にとまっていき、つい

「寂し」「うっさい」「痛っ」「ポフッ

いきなり後ろから柔らかい何かが当たり、後ろを振り向き

「夢の邪魔だ。泣くならよそで泣け！」

眠そうな目で私を見ている男の子がいた。